

村 田 義 一

前編にひきつづき、光珠内のキノコ22種を紹介します。

## 32. サクラタケ

カラマツ落葉上に秋発生します。傘や茎がすこしピンク色をした小型のキノコです。日本全土のさまざまな林で、落葉上や朽木の「上」によくみかけるキノコです。食用になります。

## 33. サケツバタケ (図-3)

深山雑木林で春先採集しました。傘が黄色のものをキサケツバタケといい、どちらも、切れこみの深い明瞭なツバをもっています。草むらやこみ捨て場など腐植の多いところならどこにでも発生する一般的なキノコですが、今のところ食毒不明です。

## 34. ササタケ (写真-24)

ポプラ見本林の地上に秋に発生します。食べられます。

## 35. サマツモドキ (写真-25)

広葉樹の切株に夏から秋頃発生します。一般には、針葉樹の切株に発生することが多いようです。軽い下痢をおこすともいわれます。

“サマツ”とは、“サマツタケ(早松茸)”ということで、マツタケが発生する前の春から夏頃、本来ならその秋マツタケが発生するはずの場所にできます。もちろんマツタケそのものです。京都南部では、ニセマツタケのことを“サマツ”といっていますが、これはニセマツタケをマツタケとまちがえたものです。

“サマツモドキ”とは、“サマツに似たキノコ”ということで、マツタケに似ているということですが、傘は黄色の地に赤紫色の小さな鱗片を

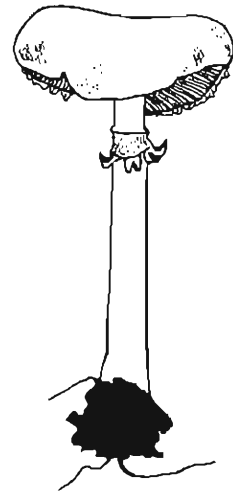


図-3 サケツバタケ

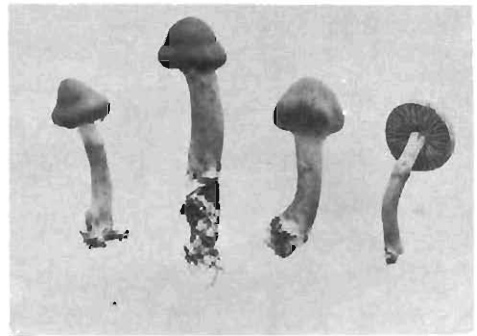


写真-24 ササタケ

\*あ～こ：光珠内季報14号、い～わ：林217号

もち、ヒダは幅狭く黄色、莖も黄色味をおび傘と同じような小さな鱗片をもつことが多く、胞子もマツタケとかなりちがうなど、こればかりはマツタケとみまわがうはずがありません。

なお、北海道で俗にいう“マツタケ”は、モミタケあるいはオオモミタケのことで、前者を“シロマツタケ”、後者を“クロマツタケ”と呼んでいます。しかし、本当のマツタケも、ハイマツ、トドマツなどの林に発生します。さらに、道南の駒ヶ岳山麓のミズナラ林では、青森県下にも発生する俗称“バカマツタケ”が今なおみられるそうです。マツタケをかたるもう一つの北海道産キノコ、“エゾマツタケ”は今のところ帰属不明です。



写真-25 サマツモドキ

### 36. シロオオハラタケ (写真-26)

ドイツトウヒの垣根、ポプラ林、萱畑など光疎内のいたるところに夏から秋にかけて発生し



写真-26 シロオオハラタケ

ます。食用になります。写真は、トドマツつぎき苗の間に発生したものです。

このキノコは、草地に茸輪(キノコの輪)をつくるものとして外国で有名です。アメリカでは、直径20mをこえる茸輪が100年以上にわたって続いていたと報告されています。マツタケなどの茸輪では考えられないことです。それだけに、茸輪内外の植生(草)と密接な関係がたえまなく続き、菌類と植物、菌類と土壌、キノコと他の土壌微生物などの相互作用

を研究する材料としてうらやましいかぎりです。

### 37. シロトマヤタケ (写真-27)

夏から秋にかけて、カラマツ林やドイツトウヒの垣根に発生します。白い小さなキノコですが有毒です。同じ頃カラマツ林に発生するオトメノカサ(食)と似ているため注意が必要です。オトメノカサは、ヒダが白色で莖に垂生していますが、シロトマヤタケのヒダはさび色で莖に上生しています。

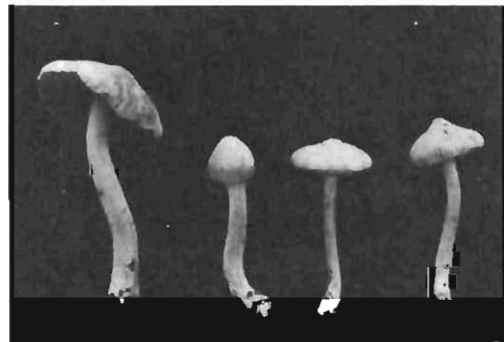


写真-27 シロトマヤタケ

38. シロヌメリイグチ (写真-28, 29)

カラマツ林に夏から秋頃発生し、カラマツと菌根をつくります(写真-29)食べられません。ラクヨウ(ハナイグチ)と同じ頃、あるいはその前、同じ林に発生しますが、量はあまり多くないようです。ハナイグチにまじって売られていることもあり、混乱されています。ハナイグチは傘が赤褐色ないし赤橙色ですが、シロヌメリイグチは汚白色ないしぶどう酒色で、赤味や黄色味をおびないものが多いようです。光珠内産にも、傘が汚白色のものとぶどう酒色のものがあり、傘の色以外でも多少ちがいますが、今のところ同じシロヌメリイグチとしておきます。写真-28は傘が汚白色のもので、このキノコはアメリカで最初に記録されたものですが、そのアメリカでさえ今だに混乱しており、専門家ですらその帰属にとまどっています。アメリカでもハナイグチほど食べられていないようです。



写真-28 シロヌメリイグチ

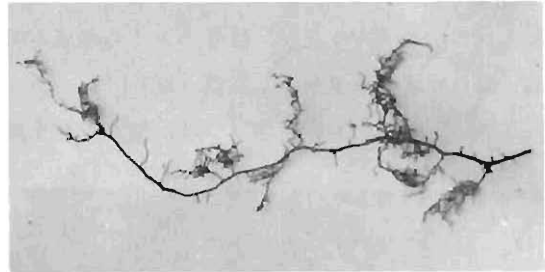


写真-29 シロヌメリイグチによるカラマツの菌根



写真-30 タマゴタケ

39. スエヒロタケ

広葉樹の枯木に発生します。扇(末広)の形をした小さなキノコです。スーフのよいだしがとれるそうです。細胞遺伝学や植物生理学の実験材料として有名です。

40. スッポンタケ

カラマツ林に夏頃発生します。樹木と関係はなく、草地や庭園などに発生するのが普通です。キノガサタケの白色のマントがなくなったものと似ています。頭部の粘液にかなり悪臭があります。

41. タマゴタケ (写真-30)

裏山雑木林のシラカンバや林試構内のウラジロモミの下に秋発生します。テングタケ(猛毒)の仲間ですが、これは食べられます。甘味があってかなり美味で

す。傘は紅色、茎は赤褐色ないし黄色、ツバと卵大のツボがあります。ヒタは黄色味をおびています。これとよく似たベニテングタケ（猛毒）は、茎が白色という点ですぐ区別できます。ベニテングタケは、ムスカリン、ムスカリジン、ブホテニンなどのキノコ毒として有名な成分を含むものです。



写真-31 チチタケ

タマゴタケは、光球内ではシラカンバやウラジロモミと菌根をつくりますが、それ以外に、トドマツ、ツガ、アラカシ、ミスナラなどの林でも採集し、かつ食べています。

このキノコは、ジュリアス・シーザーの名前を学名にもらい、「シーザーのテングタケ」とよばれています。キノコの様ででしょうか。

#### 42. チシオタケ

草むらの朽木の上に春から夏頃発生します。傘や茎は赤褐色をしています。とくに、茎を傷つけると血のような汁がにじみでます。「血汐にそまるキノコ」という意味です。



写真-33 ツエタケ

#### 43. チチタケ

(写真-31)

裏山のシラカン

バの林に秋頃発生します。ヒタを傷つけると白い乳液がにじみ出ます。乳液が非常にからいたため、細かく切りきざみ、水にひたしてから食べるとよいようです。

#### 44. チャカイガラタケ (写真-32)

広葉樹(サクラ)の枯木に発生します

#### 45. ツエタケ (写真-33)

広葉樹の切株に秋頃発生します。切株に生えるときは根に相当する部分がありませんが、地上に生えるときは茎を根のように地下深くのぼし、地中の埋れ木や枯死した木の根から養分をとります「杖茸」ということです。このキノコはかなり有望な制がん物質をつく



写真-32 チャカイガラタケ

り、最近注目されています。

46. ツガサルノコシカケ (写真-34)

シラカンバの枯木に発生します。サクラ、トドマツなどの生立木に発生することもあります。褐色腐朽をおこします。



写真-34 ツガサルノコシカケ

47. ツチスギタケ (写真-35)

秋、草むらに群生します。食用になりかなり美味です。"土の上に見えるスギタケに似たキノコ"ということですが、なお、スギタケは針葉樹、またはまれに広葉樹の枯木や切株に発生し、地上に発生することはありません、北海道にもあります

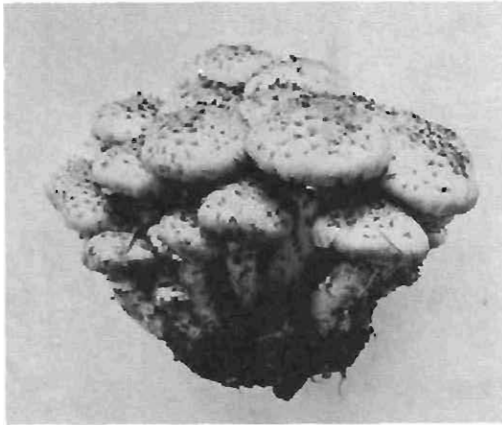


写真-35 ツチスギタケ

49. ツルタケ (写真-36)

ドイツウヒの根根に春から夏頃発生します。テングタケの仲間ですがツバがありません。鶴のように均整のとれた容姿をしています。食べられます。

50. テングタケ (写真-37)

ドイツウヒの根根に夏から秋頃発生し、それと菌根をつくります。有名な毒キノコで、毒成分はプロテニンです。傘の色の白かはベニテングタケとよく似ていますが、後者の傘が紅色であるのに反し、テングタケのは灰褐色ないし

48. ツチナメコ

夏から秋にかけてドイツウヒの根根近くに発生します。しかしドイツウヒとは直接関係ありません。林内地上に一般的なものです。食べられます。"土の上に見えるナメコ"ということですが、ナメコにはさっぱり似ておらず、食欲もわきません、



写真-36 ツルタケ

くすんだ茶褐色です。

テングタケの仲間は大形のキノコが多いのですが、猛毒キノコが多く注意が必要です。光球内に産するテングタケの仲間は、今のところ、タマゴタケ（食）、ツルタケ（食）、テングタケ（猛毒）、ベニテングタケ（猛毒）の4種類です。日本では約40種類が知られています。



写真-37 テングタケ

#### 51. ドクベニタケ

クリ林や裏山雑木林の地上に夏頃発生します。赤い傘、わずかにピンク色をおびた白い茎、白いヒダをした小さなかわいいキノコです。“毒紅茸”とありますが無毒です。食べるとすこしから味があります。このように赤い色をしたキノコは、毒々しいという印象からか気味悪く思う人も多いのですが、かならずしも有毒ではありません。キノコの食毒は、色や、茎が縦にさけるか否かなどではみわけられません。毒キノコの方がうんとすくないのですから、まず毒キノコをおぼえることです。北海道で、30種の毒キノコとそれに似たものをいくつかおぼえれば、キノコ中毒はほとんど避けられるはずです。

#### 52. ナガエノチャワンタケ（写真-38）

裏山雑木林の地上に春から夏頃発生します。今まで説明したキノコとちがって、子のう菌という菌類の仲間で、“長柄茶碗茸”ということです。キノコをつくる子のう菌には面白いものがある、このキノコのように地上に発生するものや、トドマツが菌腫病菌のように木のうに発生するもののほか、せみのさなぎに発生するセミタケ、ありの死骸に発生するオオアリタケなどのような冬虫夏草といわれるもの、さらに、ツチダンゴという別の子のう菌に寄生するハナヤスリタケやタンポタケのようなものがあります。また食菌や毒菌もあります。アミガサタケはフランス料理で珍重されますが、シャグマアミガサタケはギロミトリンという毒成分を含む猛毒菌です。



写真-38 ナガエノチャワンタケ

#### 53. ナラタケ（写真-39, 40）

夏から秋頃裏山雑木林の地上、構内の草むらやサクラの根元などに発生します。光球内のもう一つの発生場所は、オニノヤガラという無薬緑ランの塊茎です。造林地などに夏ごろ点々とみられる、淡い茶色で草丈1m位のすらっとしたランです。このランの根元にジ



写真-39 ナラタケ

ヤガイモのようないものがあり、その表面に、ナラタケが根状菌糸束という菌糸群でまつわりついています。ナラタケがカラマツやストロブマツに寄生し、それらを枯死させることはよく知られていますが、これは、カラマツやストロブマツから養分をとる過程でそれらを枯死させるものです。しかし、オニノヤガラとナラタケの関係はその逆です。オニノヤガラは葉が退化し葉緑素がなく、自分で

光合成することができません。そこでナラタケに寄生し、ナラタケから養分をもらっているわけです。ナラタケの菌糸を消化吸収して生育します。ナラタケが、カラマツやストロブマツから養分をとるどろぼうとすれば、どろぼうの上まえをはねるのがオニノヤガラやツチアケビなどの無葉緑ランというわけです。写真-40はナラタケに寄生したオニノヤガラです。

ナラタケは、名前のごとくナラなどの広葉樹の切株に群生することが多いのですが、東北地方では“サモダシ”すなわち“沢もたせ”といい、“沢筋の湿ったところに群生している”と表現します。北海道でいう“ボリボリ”とはどのような意味でしょうか。

(樹病科)

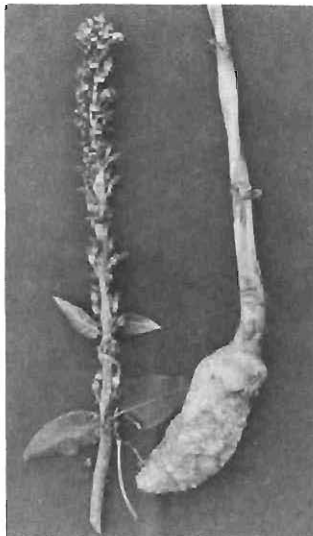


写真-40 ナラタケに寄生したオニノヤガラ (いもの表面にまつわりついているのがナラタケ根状菌糸束)